

毎月第2火曜日に十数人で酒を呑む、二火会という寄り合いがあった。会なんて柄でもないのだが、子供どころから知っていた人が多く、誘われるがままに入った。年配者はかりの中で僕1人20代後半と若く、明治、大正生まれの人も少なからずいたが、常に対等に接してもらった。

その顔ぶれ。いつも

着古した背広で身銭ま

で切り、多くの文人の

講演や取材を陰で支え慕われた図書館長。町を代表する会社を継がず、豪放磊落、繊細さを併せ持ち、下ネタ連発するも話しは落こさない貫禄たっぷり御仁。世を愁いながらも自然への思いを込め、生地を描き続ける意味を101歳まで問い続けた画家。かつての宇和島の御三家で、無手勝流の

俳句を詠み、夜の市長などとあだ名された英国趣味の洒脱者。退職金を実感しよと学校まで現金で持ってこさせ、ナップサックに詰め込み自転車で飄々と持ち帰った英語教師。世の中への憤懣を常習的にあらわにし、不器用に生きる前衛書家。顔を合わせるなり同僚に「あんた最近顔が悪な

つわものどもが宴のあと

ったのう」などと平気でう

そぶき、跡を濁さない好漢。

遠縁の俳人を検証考察し、

酔つと軍歌を歌い、水路に

落ち昇天した医師。隣室の

宴会に権威を嗅ぎつけ、いき

なり襖を開けて問答無用と

喧嘩を吹っ掛ける明治の剛

他にも、この地のことな

ら何でもござれの郷土史

家、書くことで自らを堅持

した詩人、教職のかたわら考古学に没頭する学究の徒、現況に憤る古文書読み、南予きつての神社の宮司、多くを語らず静かに座す名門紳士、明治創業の旅館亭主と、十人十色がそろっていた。この地方への理解を深め、話題や知識を得よう



と、新聞社からも常に1人は加わっていた。

会場は、僕と歳の近いオ

シドリ夫婦が営む鮮魚店2

階の座敷。さりげなく、温

かく、いつも笑顔と料理と

酒でねんごろに迎えてくれ

た。しかし、50代の若さで

後を追うように2人とも病

で亡くなり、返す返す残念でならない。

この会は、人のかたちといつものをまざまざと見せてくれた。だが、親交を重ね何かと頼られるようになったころには、皆老いて次々と鬼籍に入っていた。残される僕は、弔辞を読んだり追悼文を書いたり、

一人一人を記憶にとどめながら見送り続けたのだ。

親しみの中にも徒党を組まず、なれ合わず、個が立つ集まりであった二火会。

世におもねらない反骨と気概を持つてのびやかに生き

たつわものたち。それを包

容した宇和島という町。人

も町も昭和という時代の申し子だったのか。僕が見た

愛すべき気風。それはもう、

今では失われてしまった気がしてならない。

(吉田 淳治・画家)